

報告 1

サイードのオリエンタリズム論の
紹介と批判

稲 賀 繁 美



今日は頂戴した「お題」が「サイードのオリエンタリズム論の紹介と批判」ということですので、まずエドワード・W・サイードという人はどういう人なのか、というあたりから、まったく御存じない方も念頭に置いて、お話したいと思います。エドワード・W・サイードは1935年11月1日にイギリス統治下のイェルサレムに生まれ、カイロのヴィクトリア・カレッジを経て、1951年、アメリカ合衆国に移り、プリンストン大学、ついでハーバード大学で学位をとっています。〈ジョセフ・コンラッドと自伝の虚構〉《始まりの現象》(1975、山形和美、小林昌夫訳、法政大学出版局、1992)などをはじめとして、文学批評、比較文学を専攻とする学者です。また現在、米国の市民権をもつこと、生まれたときにアングリカンの教会で洗礼を受けたキリスト教徒であることも、確認しておく必要があります。現在コロンビア大学の比較文学の教授、ハーバード大学の教授も兼任しております。

著作概観

そこで問題の《オリエンタリズム》(今沢紀子訳、板垣雄三、杉田英明監修、平凡社、1986)ですが、1978年の出版です。わたくしちょうどその頃大学に入りまして、ある日、新宿の紀伊国屋でこの本を偶然見つけて、濃密な英語におもわず釣り込まれたのを覚えております。J.L. ジェロームの《蛇使い》が表紙で、これが生まれてはじめて買った洋書の一冊でした。その翌年、1979年でしたか、板垣先生が、それをゼミでお使いになって、参加させていただきました。それからふと気が付くと、もう二十年近くたってしまったわけでありまして、いまから二十分間でその間二十年に何が起こったか、という話をしなければなりません。

その後、サイードは《パレスティナ問題》(1979)というかなり大部で今のとこ

ろ未訳の著作と《イスラム報道》(1981, 浅井信雄, 佐藤成文訳, みすず書房, 1986)を著しており,《オリエンタリズム》とともにこれらをパレスティナ三部作とみずから見なしています。《イスラム報道》は, 原題では *Covering Islam* ですが, 既に指摘もあるように, cover というのはふたつの意味を兼ねている。つまり, 報道で“伝える”ということ“カバ―する”と申しますが, それは上からカバ―を掛けて隠蔽してしまう, つまり「現実」のイスラームというのは何かをかえって見えなくしてしまう恐れも含んでいる。これら三冊をつうじて, 西洋世界のなかで, イスラーム世界がいかに「歪曲」して伝えられているかが問題となっていて,《オリエンタリズム》の場合には, 19世紀のイギリスとフランスを中心に解剖し, そのあとのふたつの作品では, サイド自身が生まれ育った場所であるパレスティナの問題を真正面から, とりわけ《イスラム報道》では, ジャーナリズムの倫理という面から追求してきたと, とりあえずいえましょう(「現実」や「歪曲」を括弧に括っている理由には, 後に触れることにします)。

それ以外の主要著書を概観しておきますと, そのあと《パレスティナとは何か》(1986, 島弘之訳, 岩波書店, 1995)という本, ジャン・モアの写真にサイドが文を付したのですが, これも原題は全然違いまして, *After the Last Sky*。これはパレスティナの現代の詩人, マフムード・ダルウィーシュの詩句から取ったものです。そのかに文芸評論家としての仕事として《世界・テキスト・批評家》(1983, 山形和美訳, 法政大学出版局, 1995)というのがありますが, これは彼の論文を集めたもので, 例えば越境せる孤独な「知識人」としてのジョナサン・スウィフト論であるとか, また「旅する理論」という章では, 定住地をもたない学者たちがあちこち旅行して, 理論があちこち渡っていく, 理論さえ頭の中に入れておけば, 本は背負って歩かなくなつてやれるというタイプの流浪の学者がいて,《ミーメシス》の 아우エルバッハやレオ・シュビッツァもその典型ですが, そういうのが集まってきて, 北米のアカデミズムに活力を与えた, といった解釈を示した本であります。それから, これも話題になりました《音楽のエラボレーション》(1991, 大橋洋一訳, みすず書房, 1996), 原題は *Elaborations* と複数で, ピアノも玄人はだしという著者のグレン・グールドの対位法論が入っている。そしてもうひとつ日本でも大変評判になりました《知識人とは何か》(1994, 大橋洋一訳, 平凡社, 1995), これも原題はちょっと違って, 知識人の representations という言葉が見えますが, この日本語になりにくい言葉については, 後ほど触れ

たいと思います。

最後にまだ翻訳されていないものを二点。Culture and Imperialism, これは93年に出た大部な本で, いわば《オリエンタリズム》に続いて, 二十世紀に入つてからの帝国主義の歴史の展開のなかで, 文化の表象がどのように移っていったかを縦横に論じています。もうひとつの *The Politics of Dispossession* (1995), 「パレスティナの自己決定をめざす闘争1969-1994」という副題をもつ, サイドの時事的発言を集約した膨大な本です。この中でひとつだけすごく印象に残る話題を言っておきますと, サイドはパレスティナに育ったといいましたが, 実は1992年に46年ぶりに彼はその生まれた土地を訪ねる。自分の生家を探しにゆくのですが, そこは, シオニストの支援団体をやっている「国際クリスティアン使節団代表部」の所有に帰っていた, というちょっとショッキングなストーリーが出て来ます。つまりサイドという人自体が, 自分の生地から根なし草になってしまっており, 自分の過去から拒絶された境遇にあることを, 改めて46年後に確認をしたという, 自伝的独白が折り込まれている本でもあります。

なおご参考までに, これはユダヤ系知識人を含むサイドの周辺にいる人たちが, サイドに対して批判的な読み方をした本として Michael Springer 編の *Edward Said, A Critical Reader* (1992) を挙げておきました。既にその後いろいろな政治的事件が起こってしまっていますが, なお読むに値する緊張感溢れる問題提起の入門書になっています。日本語では,《オリエンタリズム》邦訳巻末に, 同書への書評を手際よく咀嚼した杉田英明さんによる論文が収められています。そのほか,《現代思想》1995年5月号,《[グリオ]》1994年第8巻などにサイド特集号が編まれていて重宝です。また《オリエンタリズム》を巡る内外の膨大な文献を整理したものとしては,《社会人類学年報》21巻(1996)に赤堀雅幸さんの《オリエンタリズム》と中東民族誌の今日》という要領のよいまとめがあります。

《オリエンタリズム》成立の背景

さて時間ありませんので, 本論に入ります。ただ先程, 余部先生からオリエンタリズム論の紹介がすでになりましたので, 繰り返しは避けながら, まず《オリエンタリズム》という書物の成立の背景を考え, そのうえでその問題点を指摘したいと思います(なお四方田犬彦さんの《最新流行》(青土社, 1987)という本

に、実に切れ味のよいサイド論が収録されていますので、舌足らずな部分は、そちらの参照をお薦めしておきます)。もともと、オリエンタリズムとは本来西洋が「オリент」すなわち「東方」と認識した地域に関する学問のことを指しています。ただし、この学問なるもの、純然たる学問的な興味だけでできあがっているとは言い難い。確かめてみれば、いわゆるイスラーム学などは、ナポレオンのエジプト侵攻から19世紀の植民地主義へ、さらにはイギリスやフランスを中心とした、アジアやアフリカの覇権争いと軌を一にして形成された学問分野であることは否定できない。ところが、近年にいたるまでそうした政治的、経済的、軍事的な背後関係は、イスラーム学や中東研究にあつては、まったくといってよいほど無視されてきたし、また政治的な問題は、無垢で純粋たるべき学問研究とはまったく無関係である、ないしより積極的に、無関係であるべきだ、といったご託宣が繰り返されてきた、といえましょう。

それではなぜこのように、それまでいわばタブー視されてきた政治と学問との秘められた癒着が、ここであらためて問題になってきたのかというと、大局的な時代背景として以下のような事情が見えてきます。ひとつはアフリカの植民地が次々独立していく60年代という文脈。さらにアメリカ合州国では、公民権運動の高まりとともに、「黒人」や少数民族の意識が高揚します。これは、後で板垣先生にうかがいたいと思いますが、1951年に16歳で北米に移住していたサイドは、67年の中東危機を切っ掛けとして、パレスティナの出自を改めて認識するようになった。それまでは、ただ単純に英文学を専攻する学者米国市民に収まっていたのだが、事態は1967年半ばで永遠に異なったものになった、と自ら証言しています。さらに1969年のヴェトナム戦争終結によって、アメリカ合州国市民は、それまで素朴に信じてきた善意とか正義などの押しつけが、実は一種偽善性を孕むことを、否応無く悟られた。

こうした時代に、世界の大学は紛争の季節を迎えました。そこで、つぎに当時の学問状況を復習してみますと、学問の中立性への疑義が表面化してくるものこの前後です。これは今でも自然科学の先生方にはかなり真面目に信じていらっしゃる方もおありなのですが、つまり本当に科学的な態度にもとづいた真理の追求は、政治的な操作とは無縁であり、正しい科学教育を施せば幼稚な洗脳（マインド・コントロール）に騙されるはずはない、というような信念があります。これはオウム真理教の事件のときも、繰り返し新聞論説に出た説ですが、しかし実際

のところ科学的探究には、それが政治的に悪用されることを避ける安全弁はついていませんし、政治と無縁な純情な科学者にかぎって、かえって政治的手先に利用されやすいのも否定できません。

とはいえ、はたして知識というものは、価値中立な純然たる学問の所産であるといえるか。いやそうではあるまい、という疑義は、実は哲学的な認識論の方ではとっくの昔から出ていたことであります。古くはフランシス・ベーコンのイドラ、虚妄というのがあります。四つのイドラというのは高校の時に習いになったと思いますけれど、人間の知識というものは、そうしたバイアスからけっして自由ではない。また、ジャン＝バティスト・ヴィーコというイタリアの学者がいますけれども、彼は人間の知識というものは人間が作ったものなのだから、人間であるかぎり理解できるはずだ。しかしながらその理解は、もはや絶対なる神の抱いていた真理とは、いやおうなく異なったものとして断絶しているはずだ、ということを言っています。それから19世紀になりますと、カントが《純粹理性批判》で「物自体」には認識は到達しえない、という見解を示したのはいうまでもなく、ニーチェはさらに、認識する側の主体の関心ということと無関係に存在する客観的な知などというものは虚妄である、とはっきり宣言しています。

このニーチェの言葉は、どうしたわけか六十年代後半からのいわゆるフランスの構造主義で非常に大きく取り上げられるようになってきます。《知の考古学》（中村雄二郎訳、河出書房新社、1985）のミシェル・フーコーとともに、最近翻訳されたミシェル・ド・セルトーの《歴史のエクリチュール》（佐藤和生訳、法政大学出版会、1996）などは、こうした真実観問い直しの記念碑といってよいでしょう。また、例えば合衆国では科学史家で最近亡くなったトマス・クーンという人が、《科学革命の構造》（中山茂訳、みすず書房、1973）という本で、パラダイムという考えを示したのも1969年です。これも、科学は自然界をより合理的・整合的に説明する方向へとのおのずと進化してゆくのだ、といった通念を打破して、そもそもまったく無前提に客観的な知識などといったものがあるわけではなくて、学者たちはなんらかの前提や型、問題意識さらには共同体の掟などといったものを共有し、意識的、無意識的にそうした範型（パラダイム）に乗っかって自分たちの知的な営みをしているんだ、という主張でした。さらにクーンを直接意識した著作ではありませんが、ヘイデン・ホワイトは《メタ・ヒストリー》という1973年の著作で、ノースロップ・フライらの神話的原型論を利用して、例えばミシュレ

はロマンスとして、ランケはコメディとして、トックヴィルは悲劇として、ブルクハルトはサタイヤとして歴史を描いた、といったふうに、歴史記述の想像力類型の詩学を提唱しています。歴史記述はこうした詩的構想力によって裏から支えられているのであって、それを排除した事実そのものの記述など不可能なのだ、という認識が本書には一貫しています。

このように学問の世界、とくに人文科学の世界では、60年代末の大学の危機以降、学問的認識論の客観性、中立性への懐疑が大きく広がっていた。そしてこうした「異議申し立て」の潮流が交わって奔流となる地点に生まれたのが、『オリエンタリズム』だったといってもよいでしょう。

《オリエンタリズム》論争瞥見

以上を前提として、次にサイドの『オリエンタリズム』が巻き起こした論争を振り返りたいと思います。サイドの著作がいかにかに批判されたかを復習することで、争点を見定めておくためです。サイドの「オリエンタリズム」批判にもっとも強く反発したのは、伝統的にオリエンタリズムについて文献学的な研究をしてきた、いわゆるオリエンタリスト、東洋学者たちでした。一番有名なのは、今でも大御所として君臨しているプリンストン大学のバーナード・ルイスという人です。詳しくは「オリエンタリズム論争」として、『みすず』(1983、1月号、2月号)に福島保夫さんの訳が出ておりますので、ご参照ください。論点はふたつに絞られます。まずサイドという人はオリエンタリズムに関する専門の研究者ではない。だから言っていることには学問的に間違いや誤解が無数にある。それと同時にふたつめとしてもっと重大なのは、われわれ、つまりルイスたちが一生懸命にオリエンタリズムについてまじめに文献学的な貢献をなしてきたにもかかわらず、サイドはそれをあたかもヨーロッパ側が、アラブ側の知識を一方的に奪い取ったものであるかのように述べている点だ、とルイスは主張します。サイドの論はアラブ側の被害者妄想から発した、オリエンタリストに対する誹謗中傷でしかなく、専門の学者としては、かかる批判など、学問への冒瀆であり、学問的に取り上げるには値しない、というわけです。

それに対するサイドの返答は、日本語訳の最後に付された〈オリエンタリズム以降〉というサイド自身の文章や、さらに〈『オリエンタリズム』書後〉(杉田英明訳、『みすず』1996、1月号)と題された、サイドの論文(1995年版に「後

書」として加えられた)に沿ってごく簡単に答えると、以下の二点となります。まずひとつとして、サイドはあくまで自分が中東研究の専門家ではない、ということをごんじで認めています。ただしそれはルイスの批判に屈するためではありません。むしろ逆にサイドは、専門家こそが正しい知識の所有者たる権利と権威を有するとする、ルイスの暗黙の前提そのものに、耐え難い知的傲慢さを見ているようです。ふたつめにそれと関連して重要なのは、サイドが「私には、真のオリエンタリズムないしイスラームとは何なのかを示すことなど何の興味もないし、ましてやそれを行う能力もない」と言明していることです。ならばサイドは何をしようとしたのでしょうか。

ここで、サイドの立場を際立たせるために、黒田壽郎氏の名を挙げさせていただきます。最近黒田氏によって翻訳されたハイム・カーバーの『イスラームの国家・社会・法』(1994、藤原書店、1996)の帯には、「オリエンタリズムの構造をあばく」という文句とともに「サイドの先へ!」という挑発的なコピーが見えますが、本書の「はじめに」と訳者解説「失われた文明の貌を求めて」で、黒田氏は「中東世界について物語る言説の虚構が、いかに組織的に作られ、それが白日堂々と闊歩しているかについて」見事な分析を行った著者としてサイドを評価し、西欧における中東世界認識にあっては「あたかも真実が語られているようで、実はそれが隠蔽されている」ことに問題がある、と指摘しています。ヨーロッパのイスラーム学がイスラームの真実にまったく迫ろうとはせず、自分たちに都合のよい言説を一度作ってそれに学問的権威を与えてしまうと、今度はイスラーム圏の人々みずからも、ヨーロッパの権威に汚染されて染まってしまう。だからこそ「オリエンタリズムの罠に囚われず、真実を探究する」必要がある。サイドはその端緒を開いたが、しかしかれは「地域研究の専門家ではない」。専門的な立場から、学問的権威の中核での「捏造」のさまを見極めるべく、さらにサイドの先へと進まねばならない、というきわめて明瞭な立場が、ここには示されています。

「真のオリエンタリズム」など関心の外とする文芸評論家、サイドと、まさにそのオリエンタリズムの「真実」の解明を学問的課題とする専門家、黒田氏とでは、同じ「オリエンタリズム」批判でありながら、その目標は大きく対立しています。この差を理解するのに便利なので、『国立民族学博物館研究報告』(21巻4号、1997)に小田亮さんが発表された〈ポストモダン人類学の代価〉という大論文を取り上げ

ます。そこで小田さんは、本質主義者(essentialist)と構成主義者(constructivist)の区別を示しています。西洋とは何か、イスラームの真実とは何か、といった問いに解答を与えようとし、また与えられると考えるのが本質主義者であり、反対に事実をたいては認識はあくまで観察者において構成される、とみるのが、さしあたり構成主義者であるといえましょうか(これでは観察者を特権化する危険がありますが、今深入りしません)。ちなみに、サイドは自らをもちろん「非本質主義者」と規定しています。

ここで、表象 representation という、サイドがよく使う言葉が問題となります。サイドが問題としているのは、知識そのものやその真偽ではなく、知識というものがいかに物事を描いてみせるか、いかに現実と呼ばれるものを構築してしまうか——の様態です。表象 representation とはそうして構築された「像」を意味し、またそれによって物事が「代行」される事態を示し、そうした「像」が何かを「代表」するに至るまでの現象を指す言葉です(ホホワイトと違って、サイドは「表象」もまた現実の一部と認識しています)。ただ注意したいのは、それなら表象によって歪められる以前の「真実」なるものを、はたして我々はそれとして認識できるのか、というすこぶる哲学的な問題です。そうした「真実」を楯にして、「歪曲」を糾弾するならば、はたして誰にそうした「真実」を所有する権能があるのか、という問題が持ち上がってきます。(こうした規定そのものが「本質主義」的ですが)はたして「西欧人」には「アラブ世界」を知ることは(権利としてだけでなく、能力としても)できないのでしょうか。「イスラーム教徒」ならば「イスラーム世界」が理解でき、アラビア語を知らない者には《クルアーン》は究極的には理解できないのでしょうか。

実はこの点で、《オリエンタリズム》という著作には無視できない曖昧さが宿っています。そして、それを最も鋭く指摘したのは彌永信美さんだろうと思います。《歴史という牢獄》という、1988年に上梓された本ですが、簡単に申しますと、彼はそこでこう言っています。つまりたしかにサイドは自分が分析するテキストを、あくまで学問的に分析するような顔をしている。十九世紀のルナンであるとか、フローベールだとかといった文筆家のテキストを学問的に分析してみせながら、しかしそこに現れる学問土壌とか知的認識の仕方を、サイドは「オリエンタリスト」特有の偏見や歪曲として糾弾している。つまり言い方を変えますと、表向きは客観的な学問をしているような顔をして、真意ないし下心としては、政

治的なプロパガンダをやっているに等しい。ところでバーナード・ルイスをサイドがやっつけたときの論法も同様です。バーナード・ルイスは表面的には厳密かつ無垢な学問的営為を標榜しながら、実際にはシオニズムのイデオロギーの片棒かつぎをしている、というのがサイドの噛み付き方でした。とすれば、この点では事態はまさに泥仕合で、サイドは論敵たるルイスを非難するまさにその同じ論法で批判される余地を残していることになります。

彌永さんはこうした混線を学問的な弱点と判断しておられますが、この点は評価の分かれるところでしょう。いずれにせよ、その結果、サイドは、本書の出版以降、今まで抑圧されていた少数派(マイノリティ)の声を、たとえば北米のアカデミズムの中でまかり通るようにした知的關土に祭り上げられてしまう。はたして確信犯だったのかどうかはともかく、学問上の議論に政治への通路を穿つという「規則違反」を敢えて犯したことで、今までの東洋学、オリエンタリズムという学問の在り方が、それがサイドの意図だったのかどうかはさておき、ともかく結果として、打破された、とまではいえぬにせよ、もはや回復不可能なまでの深い疑問に付された、という面は否定できません。だが逆に、サイド自身は、まるで反西欧の騎手のように見立てられ、アラブ世界の側からは、自分たちの擁護者であるかのような役割を演ずることを期待され、またそれゆえに、《オリエンタリズム》においても、そうしたあるべき姿に抵触する部分は、アラブ世界では検閲されて受容されるという経緯を辿ったと、サイドは告白しています。情報操作の危険を暴露した本人が情報操作の対象となってしまったわけで、ここから異文化間理解や翻訳の倫理、声なき民に声を与えるという逆説といった問題が提起されるばかりではなく、そうした矛盾の結節点(かなめ)に立つ知識人の役割に関する議論も出発するわけですが、ようやくサイド批判のとは口に至ったところで、すでに時間を超過してしまいました。ここで一旦、とりあえず打ち切りといたします。

(国際日本文化センター助教授)